討　　論

堤一昭　5 人の方の報告を受けて質疑等を行います。コメントを受けて情報交換の場になればと思います。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の中見立夫先生に最初にお願いします。上八[1]時代に，すでに『フフ・トグ（*Köke tuγ*, 青旗）』をごらんになったとのことで，お教えいただければと思います。

中見立夫　今日は大変有意義な研究発表をありがとうございました。今年は，キャフタ協定締結 100 周年です。一昨日まで北京からウランバートルに行き，ウランバートルからキャフタに行って講演して，また北京から大阪空港に着いて展覧会を見に行き，東京に戻って今朝，新幹線に乗ると指定席は満席です。何とか座れてやってきました。

古い話から始めさせていただきます。「石濱文庫」を最初に見たのは，なんと上八時代，1970 年代前半です。この席におられる方でその時代を知っている方がいるかどうか。ほとんどの出席の方がひょっとしたらまだ生まれていない時代ではないかと思います。その時は汚い校舎でして，それが印象に残っています。大変なご苦労をされて大阪外国語大学が「石濱文庫」を手に入れた直後に見に行ったのです。その時は，『フフ・トグ（青旗）』を見に行ったのではないのです。立派な目録（『大阪外国語大学所蔵石濱文庫目録』1977 年版か）をいただいていたのです。ロシア帝国の外交文書（集）であるオレンジブックに，一冊だけモンゴル関係の資料集があります。それがその『目録』に著録されていて[2]，探してもらったらすでに無かった。その後も手紙でやりとりしても，とうとう見つからなくて。でも不思議なことに日本の外務省で見つけ，1913 年の露中宣言のことで論文を書きました。オレンジブックは収録された文書に改ざんがあるので有名です。モスクワの外務省文書館で外交文書の原本を確認し，（日本の）外務省所蔵本の写真も撮っています。薄い冊子ですが，今からでも一応探されてみて，現物があればめずらしいものなので，よろしいと思います。

大阪外語（大阪外国語大学）が（箕面キャンパスに）移転した後にも，何回か来ました。モンゴル語の新聞『フフ・トグ（青旗）』などにも興味がありました。感心したのは『ニースレル・フレーニー・ソニン・ビチグ（*Neyislel Küriyen-ü Sonin Bičig*，首都フレー新聞）』があったことです。これは，1911 年にモンゴルが独立した時のウルガ，ウランバートルの新聞です。日本で見たのは初めてです。全巻はないのですが，その全部のコピーをとりました。『石濱文庫目録』を作って賞をとられ，後に大阪外語を辞められた図書館員[3]の方に，これは珍しいものですよ

---

[1] 大阪外国語大学は，外国語学校時代から 1979 年に現在の大阪大学箕面キャンパスに移転する前まで，大阪市天王寺区上本町 8 丁目にあり，「上八（うえはち）学舎」と呼ばれた。

[2] *Сборникъ дипломатическихъ документовъ по монгольскому вопросу : 23 августа 1912 г.-2 ноября 1913 г.* / Министерство иностранныхъ дѣлъ, С.-Петербург, 1914（16 p, 30 cm. 請求番号 319.226，登録番号 99900276975）を指すか。

[3] 布川嘉佑氏は「東洋学関係資料（石濱文庫）の

と伝え，綴じてもらい表紙をつけました。もう一つ『ムクデニー・モンゴル・セトグール（*Mügden-ü Mongγul Sedkül*，奉天蒙文報）』という復刻版がかなりの量あります。その後，満洲語の本を調べにきた時に見たら，マイクロフィルムになっていました。田淵陽子さん[4]はそれを使ったといっています。今日は『フフ・トグ（青旗）』がまとまってあるという話ですが，大阪外語の「石濱文庫」には他の（モンゴル語の）新聞もあるのです。

東洋文庫にも『フフ・トグ（青旗）』があります。昔は，倉庫の中に段ボール箱に入れて置いてありました。戦前期，20 世紀になってからのモンゴル（の刊行物）は，東洋文庫に結構ある。『シネ・トリ（*Sin-e Toli*，新しい鏡）』という，ウランバートルの，ウルガの時代に出た有名な雑誌があって，昔は洋書の中におかれていました。そういうモンゴル語文献を，島根県立大学にいる井上治さんに，引き出してモンゴル語の方に一括して置くようにしてもらいました。ただ，探すとまだまだ出てくる。今回は欠けている分を見つけるわけですね。（『フフ・トグ（青旗）』は）最後は何年まで出ていましたか。

堤　1945 年6月頃[5]までです。

中見　6 月ですか。よく調べられたら『フフ・トグ（青旗）』は全部見つかるでしょうね。『シネ・トリ（新しい鏡）』は，第 1 号から第 3 号まで全部，東洋文庫にあります。第 1 号第 1 冊は 2 冊ある。一部はモンゴル問題で活躍したロシアの外交官コロストヴェツからモリソンにプレゼントされたもので，コロストヴェツのサインがある珍しいものです。以前出た『モリソン・パンフレット』の目録にもその旨書いています。ところが，東洋文庫ではモリソン・パンフレットを製本したとき，そのサインの頁を削除してしまい，驚きました。

『ニースレル・フレーニー・ソニン・ビチグ（首都フレー新聞）』，『シネ・トリ（新しい鏡）』については，モンゴル科学アカデミー歴史研究所のチョローン（Чулуун, Сампилдондовын）所長が熱心で，ぜひ写真にくれと言っています。『フフ・トグ（青旗）』もそうですが，劣化がひどいのです。大阪外大は国際的に貴重なものをお持ちですので，よく考えられて（画像による公開を）なさるといいと思います。

もうひとつ，東洋文庫では松筠（スンギュン）が満洲語で記した書，『百二十老人語録』[6]鈔本を数年前に買いました。東洋文庫のものの方が良い写本です。『百二十老人語録』の別の鈔本が大阪外語の渡部（薫太郎）のコレクションにもあります。日本の満洲語文献コレクションとしては，東洋文庫，天理（天理大学附属天理図書館）と並んで，大阪外語のものはいい。渡部薫太郎は，関東州で写真屋をやっていたという，はっきり言えば胡散臭い人ですね。目録はあるのですが，作り直そうと思って，杉山清彦君（東京大学大学院総合文化研究科。大清帝国史）が大阪大学にいた時，岸田文隆さん（大阪大学大学院言語文化研究科。朝鮮語学・満洲語学）とでチェックしてもらいました。（堤の報告にあった『庫倫事宜』は，）庫倫辨事大臣の満洲語の手紙を写したもので，珍しいです。『フフ・トグ

整備に関する功績」により，第 11 回国立大学図書館協議会賞（昭和 51(1976)年度）を受賞された。

[4] 田淵陽子氏。著作に「1945 年東アジア国際関係における「モンゴル独立問題」」（博士論文（平成 15 年(2003)），大阪外国語大学）ほかがある。

[5] 石濱文庫所蔵分で「康德十二(1945)年七月二十三日」付けの 178 号まで刊行が確認されている。

[6]満洲語のタイトルは，Emu tangû orin sakda-i gisun-i sarkiyan bithe）。松筠（スンギュン）は，清朝乾隆年間の蒙古正藍旗の人。当時の旗人の生活を記した貴重な史料。日本での鈔本所蔵は長らく大阪外国語大学所蔵のもののみであった。神田信夫「『百二十老人語録』のことども」『満学五十年』，刀水書房，1992 年，113-117 頁（原載は『岩波講座世界歴史月報』21 号，1971 年），橋本勝「『百二十老人語録』について」『大阪外国語大学附属図書館報 Library Information』第 9 号，1997 年，7 頁参照。

（青旗）』だけというより，ぜひ，いろいろな大阪大学の満洲語，モンゴル語の貴重書をどういうふうに公開するかを考えていただきたい。

ちなみに，画像をクリックしたら日本語の翻訳テキストまで（表示される）という遠大なる計画をお持ちのようですね。それに近いことを一つだけやったことがあります。横浜ユーラシア文化館に江上波夫先生が集めたオロン・スムの資料がある[7]。14～16 世紀の遺跡で，モンゴル帝国の皇帝の姻戚のオルドを発掘して，ヨーロッパのゴシック式の僧院が見つかったという大発見です。江上さんが 20 世紀の世界中の考古学者の有名な 10 人の中に入る最大の理由は，これを発見したことです。それでヨーロッパに招待される。江上さんは僕と同じように資料を集めるのだけど，どこにいったか分からないと言う。（資料を）見たいというモンゴル人が来たものですから，江上さんのマンションにつれて行き，２時間かけて探し出しました。僕は「どこにいくかわからないから，古代オリエント博物館にもっていけ」と言ったのです。その後，江上さんは古代オリエント博物館に入れずに横浜市に寄付されました。画像にされていますから，横浜市ユーラシア文化館のホームページを見てください。カラー画面が出て，モンゴル語のところをクリックするとローマナイズも出て，日本語も出てくるシステムを作りました[8]。これは私の本来の仕事ではなくて，責任者にさせられただけの話です。

『フフ・トグ（青旗）』に関して，大阪大学のプロジェクトでは画像に撮って，全部をクリックして（ローマ字転写も日本語訳も出るように）するというのですね。周太平さんもおられるし，貴重なものもお持ちなので，そういうものを，高度な（画質の）映像化をして CD-ROM にされて，総合目録をつけた方がいいですね。（そうしないと）モンゴル語ができない人には『フフ・トグ（青旗）』を利用しようがないのです。そこまで，（内モンゴルからの研究者に）頼ってやる必要はないかもしれない。複製本も日本の新聞社がやっているような形（縮刷版）で出されてはどうでしょう。（『フフ・トグ（青旗）』の）内容のかなりの部分は日本語の翻訳なのですね。（記事内容の）成立過程も含めて，再整理して公開していくかという課題です。『フフ・トグ（青旗）』というまとまったものを持っていることは大きな資産なので，大阪大学のプロジェクトとして公開と活用の方法をよく考えられたらよいのではないかと思います。ところで拓本はどうなっているのですか。まだ段ボール箱の中ですか。

堤　拓本は今，整理に向かっていて。中性紙製の専用の箱に入れています。

中見　（堤の報告に）『蒙古源流』の内藤湖南手沢本があると書いてありましたね。ちなみに，大阪外語の最初のモンゴル語の先生の一人は，内藤湖南の娘婿の鴛淵一さんです。その後，広島文理大学に移りました。彼が（広島大学に）残していった満洲語，モンゴル語の拓本類は，誰も見ないので（長らく）置いたままだったらしい[9]。鴛淵さんの同僚の浦廉一さんが『百二十老人語録』を最初に研究した人です[10]。いっしょにやったのが東南アジア史の伊東隆夫さん。韓国で『百二十老人語録』の翻訳が出ています

---

[7] 中見立夫「江上波夫と内モンゴルのオロン・スム遺跡調査」『オロンスム：モンゴル帝国のキリスト教遺跡』，横浜ユーラシア文化館，2003 年，77-88 頁。

[8] 現在は，ホームページから「収蔵資料・検索」→「資料データベース・オロンスム文書」と進み，文書リストのサムネイル画像か収蔵番号をクリックすると，カラーの画像とテキストのローマナイズが表示される。

[9] 寺地遵「故鴛淵一教授蒐集 広島大学文学部東洋史学教室所蔵満蒙史関係拓本紹介」『広島大学東洋史研究室報告』第 9 号，1987 年，37－41 頁。

[10] 浦廉一，伊東隆夫「満語「一百二十老人の話」の研究」『史学研究（広島史学研究会）』(52), 1953 年，61-79 頁。

が，面白いことに底本は大阪外語の所蔵本です。10 年前に東洋文庫は 満漢合璧鈔本，『満漢百二十老人語録』を買いました。

時々，内藤湖南のサイン入りの手沢本も売りに出ていました。大阪外語の鴛淵一さんは，内藤湖南の記録によく出てきます。（内藤湖南は，）最初に北京で（『蒙古源流』の）漢文本を買って，瀋陽では満文本も買おうとする。モンゴル語本がなかなか見つからなくて，それは青写真を撮ったと細かく出てきます[11]。（堤の報告で紹介された『蒙古源流』の内藤湖南手沢本[12]は）漢文本で，内藤湖南が書き入れをしているだけであって（史料的）価値は全然ない。ただし満洲語本の内藤湖南が買ってきたのは京大の東洋史にあるはずですよ。今はどうなったか知りませんが…。

ロシア語資料でも貴重なものは，かなりマイクロフィルムで見られる。バラーノフの『バルガ』は，東洋文庫にもあるでしょう。ビロビジャンの新聞は珍しいかもしれませんが，ドイツあたりにいったら見られるでしょうね。そのあたりは，資料のアクセスや国際的な役割を考えて，もっと効率的なプロジェクトを構想できるでしょう。京都大学にも，法学部にモンゴル語の珍しい資料，法制史のものを集めたものがありますよ。文部科学省も東洋学のデータベース化をやっているくらいですから，（協力・分担して）資料の発信をされるといいのではないかと思います。

公開に関しての著作権の問題をおっしゃったけれども，著作権はそれぞれの国の法律に拘束されるのです。満洲国は傀儡国家で，なくなった国家ですから，満洲国の著作権が法的拘束力があったかどうか，問題ではないのです。大昔の本の著作者なんて分かりっこない。むしろ現在持っているところが自由に資料を提供するかどうかというところが問題です。この前も，モンゴル語聖書の国際プロジェクト[13]があって，東洋文庫に（著作権のことを）尋ねてきたそうです。聖書の著作権なんて誰にあるのですか。翻訳権とか翻訳者が（本に）書いてあるわけではないのです。満洲国での著作だなどと考える必要はないでしょう。日本の国会図書館がやっているように貴重な資料を積極的に画像で公開していくことが大切です。ダウンロードされることが問題であれば制限したらいい。

『フフ・トグ（青旗）』を日本人の研究者で使う人は，あまりないかもしれない。しかし，（この資料は）重要なのですよ。モンゴル史の観点に立てば，独立国家というのはすごいものです。清朝時代以降の公文書がずらっと残っている。それこそ政策の展開過程が追えるわけです。一方で満洲国のモンゴル人向けの新聞，しかもかなりのニュースは他からとってきているもの。今後，周太平さんやバイカルさんが（成果を）出す時に，日本側が（『フフ・トグ（青旗）』の記事を）どの程度チェックをしていたかという問題を考える必要があるわけです。当時の満洲国のモンゴル人がモンゴル語で自分たちの考えを，ある程度書けたというのが『フフ・トグ（青旗）』です。最近，東京で女性研究者 3 人か 4 人が，モンゴルの教育や文芸問題で学位を取

---

[11] モンゴル語版を青写真で撮ったことは，内藤虎次郎「奉天宮殿にて見たる図書」『内藤湖南全集第 12 巻』筑摩書房，1970 年，「目睹書譚」所収。「奉天訪書日記」（『全集第 6 巻』），「奉天訪書談」（『全集第 12 巻』）には『蒙古源流』への言及がない。

[12] 内藤虎次郎，前掲「奉天宮殿にて見たる図書」註 2（41 頁）に「（『蒙古源流』の）漢訳本は官版と文溯閣四庫写本とは異同があるので，所蔵の流布本に朱藍両筆を以て官版と文溯閣本との対校をした。」とあるものに相当する。学術史的な価値にとどまる。

[13] 「I. J. シュミットの聖書翻訳 200 周年記念国際シンポジウム「聖書のモンゴル語翻訳と精神史」が，2015 年 9 月 4 日にウランバートルで開催された。本ワークショップ報告者の一人，都馬バイカル氏も「スウェーデン宣教団の出版活動及び聖書翻訳」と題する報告を行った。

り，『フフ・トグ（青旗）』を使っています。というのは，満洲国の政府の公文書は基本的にほとんど残っていない。ましてモンゴル語の文書などはほとんどない。回想録資料を使うか，『フフ・トグ（青旗）』に多少出ているモンゴル人の考えしか使えない。ともあれ，近代内モンゴルの史料には，モンゴル人がモンゴル語で自分の考えを書いたものはほとんどない。外モンゴルの状況とは全然違うわけです。清朝時代の行政文書も残っているし，その後，人民共和国になって以降，いくら第三者の力があったにせよ，ある程度モンゴル人によるモンゴル語の記録があるのです。満洲国期は，モンゴル人の考えを完全に自由に書けたという時代ではありません。バイカルさんの努力で，かなりの部分，いろんな関連資料を紹介しておられる。因みに『蒙文白話報』[14]は天理図書館にある。中国の北京政府の広報のためのモンゴル語雑誌です。あれを見るとモンゴル人の人名などをモンゴル語でどう表記・翻訳するのかが分かります。

最後にひとつだけ周太平さんに質問。言葉の編集委員会。チンゲルテイ（Čenggeltei，清格尔泰）と同世代の，社会科学院にいたエルデニトクトホ（Erdenitoγtaqu，额尔敦陶克陶）について。『フフ・トグ（青旗）』に出てくるエルデニトクトホのことではありませんか。彼は私も1回，1980年代に会いました。彼は興安学院出身で，戦後の内モンゴルの文字改革や語彙を決めた人です。一方で文法をやったのはチンゲルテイですね。文革の時に腕を折られたとのことですが，なかなか風格のある方でした。文革前の最初の段階では，内モンゴルにモンゴル語学者はいなかった。戦後，中国科学院の内蒙古分院ができた時，最初の言語学者はチンゲルテイ。チンゲルテイは内蒙古大学ができたから（そちらに）移って，エルデニトクトホは社会科学院にいたのです。文字改革の話をしてくれたのが1980年代なかばです。それからほどなくして亡くなったと聞きました。

話し言葉を文章にして，語彙をどう定めるかは，難しい問題ですね。たとえば「内モンゴル自治区」というけど，（“内モンゴル”について）ドトード・モンゴル（Дотоод Монгол / Dotuγadu Mongγul）とウブル（南）・モンゴル（Өвөр Монгол / Öbür Mongγul）と二つの言い方がある。内蒙古人民革命党の「内モンゴル」はドトード・モンゴルです。「内モンゴル」自治区はウブル・モンゴルなのです。いつ誰がこちらに来て（言葉を決めて）いったのかが分かるような話を，モンゴル人とやった方がいいかなと思います。ウブル・モンゴルは清朝時代からです。ドトード・モンゴルは漢字「内蒙古」からの翻訳なのです。なぜ戦後，内蒙古人民革命党はドトード・モンゴルだけど，内モンゴル自治区はウブル・モンゴルになったのか。本来はドトード・モンゴルでもいいのだけれど，謎です。

長々と話しました。ちなみに石濵さんは薬問屋の坊ちゃんで，仕事は全部任せて，丸善にくる（東洋学の）本は全部買ったという有名な方なのだそうです。

堤　70年代前半のことからの情報，アドバイスをありがとうございました。“オレンジブック”のような小冊子類は心して探したいと思います。

中見　他の新聞等も，1920年代くらいのもの，『奉天蒙文報』などもあるはずです。

堤　それは内田先生も前に調査されていると思いますが，周先生から。

周太平　堤先生の報告にも指摘されていた東京日日新聞 1927 年の記事では石濵純太郎が

[14] 大阪大学外国学図書館（旧大阪外国語大学図書館）「旧分類」にも1～18号所蔵される。内田孝「内モンゴル近現代文学研究からみた『青旗（フフ・トグ）』紙：モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ」『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』のデジタル化と公開の可能性』OUFC ブックレット第7巻，2015年，注(3)参照。

『モンゴル・シネ・セトゥグール（蒙古新報）』を全部取り寄せている話がありました[15]。しかし確認したところでは『奉天蒙文報』はありましたが，先生がおっしゃった新聞はありませんでした。

中見　白い段ボール箱か何かに。目録をつくられています。

周　十数年前，2002 年ごろだと思います。その時，内田孝先生が作成された「大阪外国語大学石濵文庫所蔵モンゴル語新聞リスト」では，『ニースレル・フレーニー・ソニン・ビチグ（首都フレー新聞）』の「第 2 号～第 14 号，ただし第 6 号（第 7 号?）のみ欠号」と書いてありますが，わたしは去年の夏，石濵文庫に入って捜したところ，現物が見つからないですね。さきほど，中見先生も『ニースレル・フレーニー・ソニン・ビチグ（首都フレー新聞）』があったとおっしゃるので，どこかにあるはずです。じつは，これらの刊行物は 1910 年代のモンゴル独立時期のウルガ=フレーにて発行されていた大事なものです。くり返しになりますが，『東京日日新聞』の記事によれば，「石濵文庫」所蔵のモンゴル語新聞には確認されていないものもあると思います。

内田孝　阪大にあるとは思います。15 年前に私が見た時には，モンゴル新聞のオリジナルはビニール袋に入っただけの状態で置いてありました。図書館の方に「貴重な資料なのに劣化がひどい。ページをめくったら破れる状態です。すぐマイクロ化してください」とお願いしたら「お金がないからできない」と言われました。「それなら私がモンゴル語科の卒業生からお金を集めます」と言ったら，翌週に「お金は何とかしたからこちらでデジタル化する」と言われました。それでデジタル化が実現しました。現物がいまどこにあるかは知りません。

中見　田淵陽子さんが研究生をやっていた時は，マイクロでちゃんと見られますと。

堤　マイクロになっているものはすべて CD に焼いてあると思います。今回，CD の全タイトルが見られていないので。現物も，そうバラけてはいないと思います。後ほど探します。

中見　モンゴルが辛亥革命で独立した直後のモンゴル語の新聞で，もっと古いのはハルピンで刊行したものがあるのだけれども，ただ紙のものは破れたかもしれませんね。「こんなものを段ボール箱でおいてあるとは何事だ」と思った記憶があります。

周　『奉天蒙文報』は現物もあります。それは間違いない。しかし，『ニースレル・フレーニー・ソニン・ビチグ（首都フレー新聞）』はなかったと思います。

中見　綴じてあってね。

周　戦後，内モンゴルでは，言葉の問題だけではなく，さまざまな問題で人々が不安を抱き，民族社会は安定していませんでした。深刻な民族問題が発生し，民族の言葉をめぐっても対立が生じました。たとえば名詞術語の造語をめぐって，「中国寄り」と「モンゴル寄り」の二派が対立していました。

中見　1980 年代，在外研究の際に，会いたいというから，チンゲルテイと話をしました。（彼は）ごく初期の蒙古言語工作委員会や 1950 年代の内モンゴル社会科学研究院で，モンゴルにおける近代語の文法研究に活躍されたのです。

堤　周先生が去年（2014 年）9 月に，内田さんが前にごらんになった時のビニール袋入りの状態から，きちんとした状態に移し変えていただいたのですが，移転直前の慌ただしい時でした。内田孝さんの 15 年前のリストとつきあわ

---

[15] 昭和二（1927）年六月二十二日号。「わが国で蒙古語の新聞を蒙古から全部取寄せて読んでゐるのは，陸軍の参謀本部の外に，ひとり石濵氏を数へるのみであるといふ。」とあるので，『モンゴル・シネ・セトゥグール（蒙古新報）』かどうかは分からない。堤一昭「石濵純太郎を紹介する新聞記事 2 件および解説」『石濵文庫の学際的研究』（平成 23 年度大阪大学文学研究科共同研究研究成果報告書），2012 年，16-21 頁参照。

せて，細かいものまでは全部はチェックできなかった恐れもあります。

中見　旧大阪外国語大学にあった貴重図書は？

堤　去年 9 月から作業を始めて旧大阪外国語大学貴重図書室にあった「石濵文庫」を主とするその他のすべての貴重図書が，こちら（大阪大学豊中キャンパスの総合図書館貴重コレクション室）に移りました。「旧分類」図書は箕面キャンパス（の外国学図書館に置かれた）ままです。

中見　クーロン（『庫倫時宜』）は?

堤　こちらに来ています。

中見　大阪外語の渡部（薫太郎）文庫には「松筠（スンギュン）の日記」と称するものがあった。ところが最近，（中国の）中央民族大学の方（趙令志）が，あの有名な松筠（スンギュン）ではない（つまり『百二十老人語録』の著者の松筠ではない），別の旗人の松筠という人物が日々の生活のことを書いているものだとの研究をしている。ファクシミリ版で立派な装丁 2 冊で出版されている[16]。

堤　それはまだ確認していません。貴重図書室でも，満洲語文献を固めて置いてはありませんでした。「旧分類」図書でも，それ以外のところでも，満洲語文献はバラけて入っています。

中見　その点は岸田文隆さんがよくご存じです。岸田さんを介して（閲覧の）許可をもらったと聞いています。箕面（の外国学）図書館では満洲語のファクシミリ版のものがある。

堤　岸田さんとも最近，お話していないのです。先程の話にも出てきた渡部薫太郎からの寄贈のハンコを押したものが貴重図書室にもありました。清朝時代の誥命が 3 通，古いのは乾隆時代のものがありますが，かなり傷んでいます。他にも女真文字の拓本などがありますが，それらもバラけていて全貌はまだつかめていません。『フフ・トグ（青旗）』もようやく去年，周太平先生とガンボルトさん（鉄鋼。法学研究科博士前期課程）がちゃんとした保存箱に入れ換えました。ついこの間，『フフ・トグ（青旗）』に若干の重複本があることを，伊藤崇展君（文学研究科修士課程）といっしょに見つけました，もう一度調べ直さないといけません。どの程度，把握されているのかの再調査が今日に間に合いませんでした。

中見　渡部薫太郎は，今の北朝鮮と東北の境界の町で写真屋をやっていた。スパイだったのではないかとも思います。今，あんな資料はほとんど残ってないけれど，まして『百二十老人語録』とかをどういう方法で収集したのか。まだその時代，関東（州）には旗人たちがいた。その人たちの家から買い集めたのではないかと思います。当時の大阪外語では 1920 年代，30 年代，満洲語の授業があって，よく聞く人もいたものだと思います。そういうことは岸田君が詳しいでしょう。

堤　分かりました。ありがとうございます。

中見　まとまった満洲語文献のコレクションは，東洋文庫と天理図書館にあり，大阪大学と学習院，京大の東洋史，広島大学にもある。渡部薫太郎に情熱があったということですね。大阪大学で頑張って貴重な資料を整理してください。

堤　ありがとうございます。それでは今日の先生方のご報告に対するご質問，コメント等ございましたらお願いできないでしょうか。

石川禎浩　京都大学人文科学研究所の石川です。今日ここに来ましたのは，人文研にも『フフ・トグ（青旗）』（1～41 号）と話題になった『奉天蒙文報』（5～28 号）の現物があるからです。阪大のみなさまにはすでにお伝えしていますが，人文研で数年前，書庫の中から『フフ・

[16] （清）松筠 （穆斉賢）記；趙令志，関康訳『閑窗録夢訳編』，北京・中央民族大学出版社，2011 年。

トグ（青旗）』が見つかりました[17]。人文研がそれらを所蔵するに至った経緯は不明です。人文研にある分については，すでにデジタル撮影を終えていて，いつでも提供できるとお伝えしました。これに対して，阪大でも「石濵文庫」所蔵のものをもとにデジタル化，データベース化が進んでいるという話をうかがって，今日このワークショップに参加した次第です。私はモンゴルの専門家ではありませんが，大変魅力的なプロジェクトで，単にデータベースだけではなく，日本語で当時の年表を付加してデータベース化することにより，ナレッジベースに近いものを構想していらっしゃる点についても，大変期待しています。

2 つ質問したいと思います。ひとつは周先生に。『フフ・トグ（青旗）』からモンゴル語の近代語についての変遷や貴重なデータが得られるとのことです。今までモンゴル語の近代語の来歴については漢語の影響が大きいといわれてきましたが，『フフ・トグ（青旗）』によって日本語の影響も見られるというお話を大変興味深く伺いました。西洋のさまざまな翻訳概念を表した近代漢語は，それが日本語の影響を受けて清末に形成されたという事情があります。それゆえ，近代漢語と日本語の影響を分別するのがなかなか難しいわけですが，近代漢語と日本語をどのように区別しているのかについて，周先生にお尋ねしたいと思います。

もうひとつはデータベースに関して，いろんなデータを盛り込むことには賛成ですが，この処理についてです。『フフ・トグ（青旗）』には画像がたくさんついており，キャプションをデータ入力することによって写真の検索も可能になるとのことですが，その一方で，キャプションに書かれていないデータや，そこに写っているものが必ずしもキャプションに反映されていない場合もあると思います。データベースをつくるにあたって，画像にどのようにしてタグをつけようとなさっているのかについて，お教えください。

堤　質問のひとつ目に関して周先生からお願いします。

周　1910 年代から満洲国樹立までの時期におけるモンゴル語の新語には，漢語からの影響が見られます。もちろん，北のほうでロシア語の影響もありますが，とくに蒙蔵委員会による新語作成の基本に漢語（中国語）があった。しかし，満洲国期に新語を作るとき，日本語の『日用辞典』などの辞書を使い，当時の「新語集成」として出版された『新名辞字典』は，じつは「日本語 - モンゴル語対照新語辞典」であった。日本語の「物理」「数学」や「革命」などは，日本語から中国語に入って，また中国語経由でモンゴル語に訳されたことも考えられます。私の考えでは，『フフ・トグ（青旗）』から得る情報を，日本語の辞書を使って，それに照らしてどれくらいの言葉が直接日本語の意味を表しているのかを分析することが必要です。

石川　資料の 7 ページに「文明」と「文化」という言葉があります。これらは訳語として大切なタームですが，そもそも近代のモンゴル語のタームだったのでしょうか，あるいは満洲国時代に制定されたのでしょうか。

周　資料にある 5 つくらいの言葉は以前からありました。たとえば「商業」，「工業」，「農業」です。これに対して「文明」，「文化」，「報告書」，「明細書」や「教育」はこの時代に初めて出てきました。私の判断ではこれらは日本語を参照した結果です。

石川　この時代に初めてですか。

周　1930-40 年代に「オトガ・ゲゲン」（udq-a gegegen，文明）と言っていましたが。戦後に

[17] 小野寺史郎「現代中国研究センター配架図書に関する二，三の覚書」『人文』第 61 号，2014 年，38-39 頁。

なると，「ボルバスン」（bolbasun, 文明）という言葉が使われるようになります。現在は「イルゲンシル」（irgensil, 文明）とも使います。

石川　「文化」や「文明」について，1930 年代まで訳語がなかったとは，にわかに信じることができません。

周　それらの表現がもともとモンゴル語にはないわけではありません。「文明」や「文化」と言いますと，それは訳語ではなく，固有名詞として本来にモンゴル語に存在していました。ただ，モンゴル人はこの本来の用語を継承できず，時代にあわせて新語を作り出すわけです。もちろん，テクニカル・タームは新しく作らなければならないのです。モンゴル語には，伝統的用語の断絶，方言差の大きい，口語と文語の不統一という歴史上の問題があります。

中見　清朝時代のモンゴル語には漢語の影響が確認できます。たとえば日本のことは「リーベン」（Riben）と書いています。その後「ナラン・ウルス」（Naran ulus, Наран улс）と表記されます。さらに人民革命を経て「ヤポン」（Yapon, Япон）が使われるようになりました。1980 年代，ウランバートルに行くと「ナラン・ウルス」を使っていました。「リーベン」は中国語の訳語で，「ヤポン」はロシア語からの訳語です。一体，どの時点で，何が用いられていたのかを確定することは，社会言語学者の課題でしょうか。

周　清朝期のモンゴル語に「ナラン・ウルス」という言葉が出ています。「太陽の国」という意味です。1920 年代から満洲国時代に「リーベン」と「ナラン・ウルス」どちらも使われていました。

中見　「ドイツ」はどうですか。

石川　「文化」や「文明」については，満洲国時代に確定された言葉が使われたということですね。

中見　それは昔からありますね。「教育」も。

周　戦後，外モンゴルの方がよいということになり，それらを受け入れるという傾向がありました。しかし，外モンゴルでは，従来の「アイマグ」（aimaγ, аймаг）という言葉を「県」や「省」に相当する行政単位として使ったのは適当ではありません。「アイマグ」はもともとモンゴルの部族のことです。戦後，外モンゴルにまねて，伝統的「チゴラガン」（čiγulγan, 盟）という行政単位としての言葉を廃棄して「アイマグ」を用いるのは間違いです。

田中仁　もうひとつの画像の問題について。去年 11 月に最初の研究セミナーを開き，『フフ・トグ（青旗）』をデジタル化してウェブ上で公開したいという合意ができました。それで東洋文庫の相原（佳之）さんに，e-book として何が可能かサンプルを示してほしいとお願いしました。またバイカル先生らが作成された記事目録を拝見し，これからどのような作業を行う必要があり，どのように整理することができるのかを検討していきたいと考えています。キャプションについては，バイカル先生の記事目録はモンゴル語と日本語の表記があり，さらに写真や図についての説明を記しています。実際には，この記事目録をもとにして，どのように整理してデータベースを構築するのかをこれから考えていくことになるでしょう。e-book の可能性については，相原さんが具体的なイメージをご紹介くださいました。これをもとに検討作業を具体化したいと思います。

石川　期待しています。

都馬バイカル　配布資料についてですが，「1941 年 5 月 10 日」の「008」は項目数が 100 を超えるため三桁の整理番号をつけました。「8」は第 8 期で「1」は第 1 面，「01」は最初の記事という意味です。実際には，作業の関係で数字がずれているところもあります。複数の研究者による共同作業であり，またモンゴル語ソフトが違うため調整が必要です。「08」のところにある「蒙」はモンゴル語，「イ」はローマ字転写

です。

内田孝　中見先生から初代学長の中目覚先生の話が出ましたが，中目先生は晩年，大阪外国語学校学長時代にやり残したことというのを文章に残しています。その中に，自分たちでモンゴル活字をつくってモンゴル語書籍を刊行したかったが実現できなかったということを書いています。大阪外国語学校では1928年9月から鈴江萬太郎がモンゴル語教員になりました。この人は元陸軍軍人で，東京外国語学校でモンゴル語を学んだあと，ブリヤート方面で工作活動をしていました。陸軍を退役してからは東京でモンゴル語日本語辞典をつくっていて，それはのちに陸軍省編『蒙古語大辞典』になります。その辞書の巻頭にはブリヤートや内モンゴルの知識人や高名なラマ僧などが題辞を寄せていて，鈴江の交遊範囲の広さを知ることができます。2週間に一度，東京から大阪にきてモンゴル語を教えていましたが，1 年もたたないうちに脳溢血で急死してしまいました。それで中目学長が自ら鹿児島へ行き，そこで学校教員をしていた楠松源一先生（あべまつ・げんいち。蒙古語部第一期生）を「大阪に戻ってこい」と説得し，大阪外国語学校蒙古語部の教員になってもらったという経緯がありました。

阪大外国学図書館の「旧分類」図書資料の中には，20 世紀初頭にフレーで出版された学校教科書などの貴重なモンゴル語書籍が残っていますが，それらはこの鈴江萬太郎がブリヤートから入手したものではないかと思っています。鈴江の蔵書は東洋文庫に入っていますが，一部は大阪外国語学校に寄贈した可能性があります。所蔵に至った由来は分かりませんが，貴重な本がたくさんあるわけです。これらも利用しやすいように紹介し，古くて閲覧を許可できないものは，複製を作成するなどの工夫をお願いしたいと思います。

中見　鈴江については，東洋文庫の青木雅浩君が調べています。東京外国語大学の図書館にも一部ある。東洋文庫ではブリヤート（文献）書庫にも入っている。鈴江が東洋文庫に売ったか，寄付したか。（彼の）ノートが出てきた。それをもとに青木君に東洋文庫の「鈴江蔵書」について書いてもらった[18]。大阪外語の図書館には帳簿は残ってないですか。それを見ると何年にどこから入ったとか，価格が載っています。ソウル大学でも戦前の京城大学のものがあるとのことですし，東京外語にも昔のものが残っています。ジャムツァラーノ（Ц. Жамцарано）の『国家の権利』とか，おそらく戦前のハルピンかの本屋を通じて，ロシア語のものも含めてかなり買っていますね。東洋文庫のモンゴル本や近代関係も，北京でエージェントのようなことをしていた人が寄付している。モンゴル語や満洲語文献は，北京や奉天（瀋陽）の古本屋とかで，軍人さんが買ってきたものがあります。今は，北京の古本屋でモンゴル語の本を売っていますね。

堤　阪大外国語学部のロシア語の先生が，大阪外国語学校時代の授業の内容を調べようと思って，古い時代の学校要覧を探されたのですが，肝心の『大阪外大 70 年史』を作った際の資料が見つからないとのことでした。同窓会の咲耶会で保管されているのか，もう一度調べてみる必要があると思います。

バイカル先生，周先生のお話でも『フフ・トグ（青旗）』の記事索引で日本語の部分をどうするかが意外と難しいことが分かってきました。『フフ・トグ（青旗）』の記事の翻訳元となった日本語の記事がある場合，『フフ・トグ（青

[18] 青木雅浩「東洋文庫所蔵鈴江萬太郎寄贈図書について（含 東洋文庫所蔵鈴江萬太郎寄贈図書一覧表凡例）」『東洋文庫書報』 第 40 号，2008 年，77-132 頁。

旗)』だけでは元の日本語が分かりにくい部分がたくさんある。それらを全部チェックした上でデータベースをつくるとなると至難の技です。バイカル先生，ナランゲレル先生がつくられたものをまずは活用したい。日本語訳もバイカル先生たちが積み上げてきた業績を使いたいと思います。確定版ではなく暫定版でも，まず上げて公表しようということです。このことは，前回 2014 年 12 月の研究セミナーで民博の小長谷有紀先生が話されていました。

相原佳之　見せ方として e-book を採用するということが決定しているわけではないのですが，選択肢の一つとして，これまで東洋文庫で行ってきた e-book の実例をご紹介しました。「ウィキペディアのような」と表現されましたが，画像へのタグづけやキーワードなどを増やしていく可能性があるという点や，『フフ・トグ（青旗)』についてこれから研究の進展可能性が大いにあるという点を考えれば，ある程度柔軟性をもたせた追加可能なデータベースの形式を採用しておくのが望ましいかもしれません。ウィキペディアのように誰でも自由に書き込めるかは別にして，柔軟性をもったデータベースということです。項目は同じでも，内容を追加していくことができるデータベースや，追加したデータを含めて検索が可能になるようなデータベースというのは，開発業者の方ですでにいくつかのモデルを持っている場合が多いと思います。データベースを提供している会社で学術的なものに対応した経験のあるところと相談しながら，データベースの項目をどうするか，項目のうちのどの部分を検索できるようにするか，どの項目を検索させないようにするかなど，開発業者とご相談されたらよいと思います。経費の面でどの程度の余裕があるのかにもよりますが，使いやすいデータベースを相談しながらつくっていくことが望ましいと考えます。とはいえ，開発業者との間でデータベース構築の話を詰める前には，項目として何を採用するのかを研究者側で明確にしておく必要があります。開発業者が提示する項目は『フフ・トグ（青旗)』データベースについては不要なものもあると思うので，標準的な項目は共通させるとしても，それとは別に『フフ・トグ（青旗)』の紙面から必要な項目をリストアップし，投入しうる作業量と経費との関連でどこの項目までを実現するのかを決めていけばいいと思います。

堤　大事な点をご指摘いただきました。

田中　最初に業者の方と話をした時，データベースのありようを閉鎖型にするのか，応答型にするかがポイントだと伺いました。また利用者の検索を前提にするのであれば，サーバー設置が必須であることも指摘されました。閉鎖型での日本語部分の展開は，とても大変な作業になると思われますし，途方もない作業量になるかも知れません。私たちが構想しているのは，なるべく早く公開するために必要なことは何かということです。開放型のウィキかどうかはともかく，日本語の用語の確定それ自身が重要な研究課題となるということでしょう。重要な課題であれば，今回のような研究セミナーを開催するというように，データベースの構築と研究活動とにリンクさせることがよいと思います。とすれば，完全フリーでも閉鎖型でもないその中間的な形態として具体化するのが現実的なのではないでしょうか。

相原　そうかもしれませんね。また，開発業者にデータベース構築をお願いするのと合わせて，他にもさまざまな形で協力する機関を探すことも一案です。たとえばデータベースに強い NPO とか理工系の研究プロジェクトとかとも協力していくこともできるかも知れません。柔軟に考える必要があります。

堤　日本語の用語についての提起を受け止めて反映する。富士ゼロックスの人に「いつでも

フリーの形のウィキ的な感じにするのか。時期を区切ってたまったところを反映するサイクルをつくっていくのか？」と聞かれました。いつでもというのは不可能だから定期的に半年，1年とかが現実的だと思います。データベースを構想する時の広い意味での「設計」にあたることだと思っています。ちなみに，同じく大阪大学の「懐徳堂文庫」では目録を公開する時に，昔，本でつくったものを最初は画像だけで公開していました。専門家の目から見て誤りや直すべきところがあれば，懐徳堂記念会なり中国哲学研究室なりにメールで連絡してくれとありました。そういう試みもなされたのです。

橋本勝　この研究会は去年 12 月にも出席し，今日は，2 回目の参加です。5 人のご発表は興味深く，新しい知見を得ることができました。私は大阪外国語大学の教員 OB で，10 年ほど前に 2 年間，旧大阪外国語大学附属図書館長を務めましたが，その間にも，内モンゴルや欧米からも「石濵文庫」や旧分類の古い貴重図書を閲覧したいとお見えになりました。周太平先生がご紹介された内モンゴルの方々です。10 年くらい前，内モンゴル師範大学の U. ショゴラー（Ü. Šuγar_a, 烏・苏古拉）先生は娘（ナヒヤー）さんが東京に留学しておられることもあり，訪日されました。ご滞在中，『フフ・トグ（青旗）』をぜひ見たいと連絡を受けました。その頃は来校されれば閲覧していただくことができたのですが，結局，ご都合悪くご来校はかないませんでした。それで既にマイクロフィッシュに撮ってありましたので，先生のご要望に応じて若干コピーをして滞在先の東京へお送りしたこともありました。『フフ・トグ（青旗）』研究に限っても，私が現役（大阪外大在職）の頃，錚々たる若い研究者が閲覧にお見えになりましたが，彼らは今や一線の研究者として活躍されています。石濵文庫に関係し大阪外国語大学に在職していた旧教員として，このことをうれしくまた誇らしく思います。

20 年あまり前，内モンゴル大学の B.ゲレルト先生が奥様とご一緒に日本を訪問されたことがありました。短い滞在期間にもかかわらず，大阪外大の図書館訪問を希望されました。まだ整理が行き届かない頃でしたが，書庫に入られて 2，3 日べったりと座って書き写されていたことを思い出しました。当時，すでに日本と内モンゴルの交流が盛んになりつつあり，大阪外大でかなり多くの留学生が学んでいました。懐かしい気持ちがします。

現在は東京で一線の教授として活躍しているフフバートルさん（昭和女子大学）も，大阪外大で学んでおり，『フフ・トグ（青旗）』をはじめとする，かつて内モンゴルで発行された新聞類などを参照したいといっておりました。また，ずっと以前のこと，内モンゴル出身のインディアナ大学のゴンボジャブ・ハンギン（Gombojab Hangin）教授が天理大学で 1 年間研修をされていましたが，1982 年秋，同教授は大阪外大を訪れ箕面キャンパスの附属図書館書庫で『フフ・トグ（青旗）』などの新聞や文学関係の書籍を見て，「こんな貴重なものがある。何とかしないといけない」と仰っていました。

ウランバートルからも多くの方々がお出でになりました。勿論『フフ・トグ（青旗）』だけではなく，図書館にはモンゴルの新聞・雑誌類あるいは帝政ロシア時代に出た文献，雑誌類がかなり揃っています。嘗てウラジオストックで発行された文献資料や，ロシアで刊行された東洋学関係の書籍，紀要，雑誌類はとても貴重な資料だと思います。多くのものは『大阪外国語大学所蔵石濵文庫目録』に載っていますが，未整理で掲載されていないものも存在します。8 年前，大阪外大と阪大が統合し，1 年前に「石濵文庫」などの貴重図書が箕面キャンパスの外国語学図書館(旧大阪外大附属図書館）より豊中の総合図書館に移ったということです。環境

面では整備が徐々に進んできていると思います。堤先生や田中先生のご尽力もあり,『フフ・トグ（青旗)』のデータベース公開に向けた作業が進んでいることを誇らしく思います。これは日本の研究者だけでは無理であり，内モンゴルの研究者や日本におられる内モンゴル出身の研究者の協力をえて公開が実現することが望まれます。どこまで公開するのかについては異論があり，さらに著作権や法律上の問題はありますが，できるだけ研究者が自由に閲覧できる形でデジタル化と公開が進んでいくことを希望します。

今後，さらにモンゴル語の転写方法についても検討しなければなりませんね。

堤　ありがとうございました。今日は目録に載ってないところもターゲットにして話をしましたが，ただ『石濵文庫目録』があればこそ，洋書も漢籍もネットで全部検索できるようになっているわけです。

今日の報告者たちの目標は,『フフ・トグ（青旗)』データベースをつくりたいということです。データベース化に当たり，田中先生から，考えるべき項目のポイントについてコメントをお願いします。

田中　『フフ・トグ（青旗)』という新聞が貴重な学術資産であることは間違いないのですが，それをどのように活かしていけるか，息を吹き込んでいけるのか，さらに大阪に足場をおきながらどのようなアカデミック活動を展開していけるのかを構想したいと思います。今日，バイカル先生に初めてお目にかかり，お話をして気づいたことがありました。内モンゴルの方々にとって『フフ・トグ（青旗)』がかけがえのない貴重な資料であり，そのことが記事索引として共同で整理を行う契機となっていること，同時にその日本語訳はモンゴル語からの翻訳であり，当時実際に使われていた用語ではないことです。また相原先生には，どのようにデジタル化を進めうるのかについてのサンプルを提示していただきました。日本語の訳語の確定は，確かに大変な作業ではありますが，見方を代えると，このことは研究を進める価値があるということでもあると思います。次の一歩をどう踏みだせばよいか。さらに 5 歩 10 歩先を考えながら今日の議論を通して考えることができればと思います。

堤　今日の成果を持ち寄って次の一歩を記すためには，ライブラリアンの助言と協力が不可欠です。阪大図書館員の方々に早くからご相談すればよかったのです。直接の担当は坂本祐一さんとのことですが，野原亜希さんは大阪外国語大学図書館から移ってこられたので両方をごらんになっています。お気づきの点などございますか。

野原亜希　小都晶子先生が図書館でアルバイトされていた頃も存じあげています。また橋本先生はじめ懐かしいお顔を拝見して思い出すことも多々ありました。私は懐徳堂データベースの開発に携わっていますので，その経験から一点お伺いします。『フフ・トグ（青旗)』データベースで構想されていることは，画像の公開にいくつかの付加価値をもたせ，多言語による検索を可能にすることでしょうか。附属図書館は記事や論文を検索できるデータベース・サーバをもっていますが，それらと性質が近いのかも知れません。現在のデータベースは図書画像の公開データベースですので，書誌の中身を検索しキーワードとして画像を公開することになります。こちらは図書館が運営にあたっているものであり，テキスト化などの作業については先生方の成果を待つことになります。懐徳堂のデータベースは業者にお願いしていますが，公開後の修正，目次の追加ができる機能がほしいと考えています。

もう一点，検索時に使用する文字についてです。モンゴル文字，ローマ字転写，日本語の 3

種類をお考えですが，実際に研究される先生方として検索に使用される文字はモンゴル文字が主になるのでしょうか。

周　ローマ字の表記は統一する必要があります。モンゴル文字の場合，コンピュータ（パソコン）にモンゴル文字のソフトがないと検索できません。

野原　モンゴル語のローマ字の転写方法はどれを採用するつもりですか。

橋本　古典モンゴル語（モンゴル語文語）の転写法（ポッペ式）がポピュラーで，多くの研究者はそれによって転写しています。内モンゴルの現代モンゴル語についても，この転写法に統一すれば問題ないのではないでしょうか。

内田　複数ある転写法の対照表を付けておくことが現実的かも知れません。

橋本　内モンゴルの標準的転写法と所謂モンゴル語文語の転写法とでは異なる場合があります。また方言を反映した表記も考慮にいれますか。

バイカル　今回採用したのは，すべて内モンゴルの標準的転写法です。ただ方言を反映する点に難点があります。

橋本　若干のモンゴル文字の母音字，子音字を転写する場合，今でも表記上の揺れ（o/u , ö/ü , t/d , q/h/x , j/j ,c/č など）がありますね。

バイカル　転写法の問題は，ある程度解決できると思います。

周　大事な点を指摘していただきました。検索に用いる基準を決める問題です。当時のモンゴル語をそのまま入力したら検索できないとすれば，現代モンゴル語に書き直すのか，あるいは，どのような転写法を採用するのかを統一する必要があります。

橋本　専ら内モンゴルの標準的転写によるのか，モンゴル国の標準音も考慮しながら統一するのかという問題もあります。

内田　ポッペ式の j の上にチェックをつけるフォントはパソコンにはあらかじめ存在しないのです。東北大学の栗林均先生がつくっているモンゴル語ウェブ辞書（言語資料検索システム）や東京外国語大学図書館の転写表記なども参考にしながら，ルールを決めていくのがいいと思います。

堤　これから詰めていかないといけない問題を最後に指摘していただき，ありがとうございました。当時の表記を保存する役目もありますが，検索の時には使いやすい形が望まれます。今日いただいた意見をもとに相談していきたいと思います。これからもご協力，ご助言をいただきたいと思います。

それでは長時間，報告者の先生方，フロアの方々から情報をいただきありがとうございました。実のあるワークショップになったことを感謝します。これをもちまして本日のワークショップ「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』データベースの構築・公開に向けて」を終了したいと思います。ありがとうございました。